

あたたかい春の陽ざしに息を吹き返したように、万物が活動し始める春。自然の恵みを讃え、生物を慈しむ心を子らと共に見つめたいものですね。

【ひなまつり】桃の節句 三月三日

おひなさまは、上下の秩序や各自の位置や役目が整然と、正しく美しく、調えられていけば、その国は安泰であり、住む人みな調和を得て幸福を保つていけるという大和民族の精神の現れです。  
**左近の桜、右近の橘と呼ばれるのはなぜ？**



お雛様から見て左に桜、右に橘の木を飾ります。京都御所の紫宸殿(即位の礼が行われる)の南階下の東方に山桜が植えられており(平安時代から)、左近衛府(衛府というのは役所のこと)で、その栽培を担当し、陳列の際、この桜から南へ左近衛府の官人が並んだところから左近の桜といえます。

右近の橘は、同じく紫宸殿の階下の西方に植えた橘で、右近衛府がその栽培を担当し、また、右近衛府の官人がこの橘から南へ陳列したことからいいます。

なぜ、桜と橘が植えられたの？

桜は日本に最も種類が多く、古来花王と称せられ国花とされました。古くは「花」といえば桜を指したからでしょう。

なぜ、「ひなまつり」をお供えするの？

昔は、供物はよもぎ餅でしたが、次第に菱形に切った紅白緑を三重ねとして供えるようになりました。昔、支那に菱の実ばかり食べて長生きした仙人がいたので、長寿を祈る心からそうになりました。白は雪、緑はよもぎの若芽、紅は桃の花になぞらえたもので、いずれも邪気を祓い清めるもの

です。めでたい時に紅白を用いる訳もここにあります。

【春分の日、春季皇霊祭・神殿祭】三月二十一日

春分の日は、毎年、三月二十一日か二十二日で、この日は昼と夜の長さが同じで、その後しだいに昼が長く、夜が短くなつていきます。春分の日を中日として、前後三日ずつ、計七日間を仏教で彼岸といいます。春分の日には太陽が真東から出て、真西に入るといので、この日、仏道に精進すれば西方浄土極楽へ往けるといふ訳です。そこで寺参り、お墓参りをして先祖を偲びます。私達の命の根であるご先祖の方々に感謝し、家族皆で手を合わせることは、先祖から受け継がれてきた大切な慣わしです。祖霊(みたま)をまつる慣わしは、古い日本の信仰と仏教思想がむすびついたものです。

これと同じ意味の大きなお祭りが皇室でも代々行われています。それは、春季皇霊祭・神殿祭で、春分の日に斎行されるお祭りです。皇室の御先祖である歴代天皇・皇后・皇族に対する皇霊殿での御先祖祭り(皇霊祭)と、天神地祇・八百万の神に対する、神殿での神恩感謝のお祭り(神殿祭)からなります。宮中では、一年に大小合わせて百以上の祭祀をされますが、その中でも重要とされる大祭は、七つあり、春季皇霊祭・神殿祭はその大祭の一つなのです。

【花まつり】四月八日

「花御堂」の中に甘茶をたたえた水盤をおき、釈迦の誕生仏を安置する祭です。その仏像は、右手で天を指して「天上天下唯我独尊」と唱えています。「我はかけがえない絶対存在のひとりだから尊い」と、すべての人間の尊厳を示す姿で、「独尊」とは、自分も他人も皆、仏性を持って生まれた、という喜びの声なのです。



稲の霊は、花にのって山から田へと降臨します。

その降臨を迎えるのが花祭りで、昔から卯月八日に、山へ花を摘みに行く風習があり、摘んだ花の束を長い竹の先につけ庭先に立てる花祭りが行われていました。この花束は山の神の依代(よりしろ)だそうです。この風習にお釈迦さまの誕生祝いが重なって、花まつりの行事になりました。宮中の行事として奈良時代から行われ、江戸時代に一般のお祭りとなりました。

「いい本の読み方」

お話を語ることは、文学に対して、額縁が絵に対して果たすのと同じ役割を果たします。

これは、本を読む場合におぼえておくといいたいです。つまり、肝心なのは絵であって額縁ではないように、大事なものは物語であって読み方ではないこと、絵にふさわしい額縁が絵の美しさをいっそう引き立たせるように、物語にふさわしい読み方が、物語のおもしろさを強めるということなのです。ごてごて飾りのついた大げさな額縁よりも、あっさりとした簡素なものの方が、人の注意をそのまま絵に向けさせるといえないでしょうか。ドラマチックな読み方よりも、静かな口調の本が聞く者の心をまっすぐ物語の中に惹きこむように。ほんとうにいい読み方というのは、読み終わった時、物語の世界が、聞いた子の心に残る読み方というのだと思います。そういう絵本や本を選んで読んでやりたいと思います。つまらない絵に立派な額縁をつけてもはじまらないように、おもしろくない話を無理におもしろおかしく聞かせてもそれはむだというものです。変な言い方かもしれませんが、お話さえしっかりしていれば、読み方は相まわずとも、子どもはちゃんと聞きます。内容のない話を声色や身振りだけで聞かせるのは、むなしなことです。

ゆつくりと、すなおに、飾り気なく、そしてできれば、心をこめて読んであげてください。それが、いちばんいい読み方だと思います。(楡田 喜美子)



# 和歌コーナー



おしゅうじが おもしろかったよ またかきたい  
じかいていいですか またこんどかきたい  
わあいわあい おひなさま またつくりたい  
やったあやったあ またつくりたい  
年中 Y・T

☆お習字を楽しんでいて、うれしいです。

おひなさまと おだいりさまを つくったよ  
おうちにかざるよ しょうへいがつくったよ  
年中 K・S

☆集中して、とてもじょうずにつくりましたね。

スケートで いっぱいあそんで あしがいたかつたよ  
でもすべれたよ たのしかったよ  
年中 H・H

☆こおりの上ですべるのは、むずかしいでしょう。  
いっぱいあそべたなんて、すごいですね。

ももの木の 花がさいてる きれいだな  
とてもきれいに さいている



おひなさま じぶんでつくった うれしいな  
また来年も つくりたい

ひなかがり きれいにできた うれしいな  
かざってみたい じぶんでつくった  
スケートで そうじをしたら ピッカピカ  
つるつるすべった いっぱいこけた  
二年 H・A

☆すてきなおひなさまのかざりが作れましたね。

ももの花 じつぶつみれて うれしいな  
とつてもきれいな お花だったよ

ひなかがり おり紙つかって 作ったよ  
とつてもきれいに つくれてうれしい

ひなまつり 三月三日だ 楽しみだ  
家ではまだね かざれていない

おひなさま じぶんでつくれてうれしいな  
またらいねんも いいのを作ろぞ  
小学二年 J・R

☆心に感じた喜びを素直に和歌にしていますね。

ひなかがり おだいりさまとおひなさま  
二人つくって むずかしかった  
小学三年 Y・T

☆複雑な折り方をがんばりましたね。

おりがみで ひなかがりをね つくったよ  
たのしかったよ またつくりたい  
小学三年 Y・Y



☆一生けんめい、心をこめて作っていましたね。

ももの花 はじめてみたよ おもしろい  
ほかのはなも みてみたいなあ  
小学五年 T・I

☆梅と桃と桜の花は似ていますね。どこが違うかな。

夜の星 月といっしょに ながめます  
今日のつかれが とれそうだな  
中学一年 T・A

☆心が澄み切っていくような和歌ですね。



道の端をよく見てください。  
何か草が生えていませんか。  
何か虫はいませんか。風が吹いてきませんか。  
それをよく観察して、見つけたもの、感じたものを、  
そのままのことばで、バラバラでよいからノートに  
すぐ書いて下さい。たくさん書いたら、その言葉を  
くみあわせて、和歌にして下さい。



## 今月の論語

子曰わく、

「之を知る者は

之を好む者に如かず。

之を好む者は、

之を楽しむ者に如かず。」

孔子先生がおっしゃった。

「あることを知っているだけの人よりも、それを好きになった人の方がすぐれている。それを好きになった人よりは、そのことを楽しんでいる人の方がもっと優れている。」

わからないことがわかった時には、とても嬉しいですね。そしてもっと知りたいと思うようになります。夢中になって頑張っているうちに大好きになって、いつの間にか楽しめるようになっていく。そんな「知って、好きになって、楽しむ」の三だん飛びができたなら、最高ですね。

親子で楽しむ こども論語塾(明治書院より)

次回は 四月二十二日(土)です。

西宮市立中央公民館 601室 (文責・藤波)